

## プレゼンテーション実技科目における 「トレイト別フローチャート」を利用した ピアフィードバックの試み

### The Effect of Peer Feedback Using Flowchart Evaluation Sheet in a Presentation Skills Course

中北美千子

Michiko NAKAKITA

山田真理

Mari YAMADA

田中真理

Mari TANAKA

#### 要旨

本稿は本学外国語学部日本語学科専攻言語科目「プレゼンテーション」のクラスにおけるピアフィードバックの実践報告である。非母語話者に対する日本語教育の分野で作文評価のツールとして田中・坪根・佐々木・影山・阿部(2018、以下、田中他2018b)などにより提案されている「トレイト別フローチャート」の手法を、日本人学部生による口頭発表のピアフィードバックに応用した。評価項目とその優先順位を学生自身と話し合っってフローチャート形式のフィードバックシートを作成しピアフィードバックに使用した結果、評価項目が同じでもフローチャート形式でない、つまり項目ごとの優先順位が設定されていないフィードバックシートを使用したクラスと比較して、最優先項目として設定した「制限時間を守る」ことに関してパフォーマンスの差が見られた。

**キーワード：**プレゼンテーション、ピアフィードバック、トレイト別フローチャート、マルチプルトレイト評価、パフォーマンス評価

## 1. はじめに

### 1.1 「トレイト別フローチャート」の背景

本稿の「トレイト別フローチャート（以下、「フローチャート」は「FC」）」は、ライティングやスピーキング等のパフォーマンスを評価する際の各要素（例えば、ライティングなら good writing の要素：田中・阿部、2014）の優先順位を階層的に決め、それをレベル決定要素として段階的に評価していく方法である。

田中他（2018b）では、ライティングの自動評価システムの構築（機械学習）のために、多くのデータを評価しなければならず、かつ評価が一致しなければならなかった。一般的な評価基準（例えば、「マルチプルトレイト評価基準」：田中・長阪・成田・菅井、2009）では評価に時間がかかり、一致に限界があった。つまり、「マルチプルトレイト評価基準」の場合には、「目的・内容」、「構成・結束性」、「読み手」（読み手への配慮、読み手にとっての面白さ）、「日本語の正確さ」、「日本語の適切さ」の5トレイトに対してそれぞれ基準説明（descriptors）に沿って、また同時にレベル別説明に沿って1～6段階で評価しなくてはならなかった。そこで開発したのがトレイト別の評価用FC（「Good Writing.jp 読み手と構成を意識した日本語ライティング」）である。FC方式では、評価項目の数が絞られ、評価項目の順序が固定されたため、評価時間が大幅に短縮された。また、評価者間信頼性（一致度）のみならず、迷いが減るため、評価者自身の評価者内信頼性も確保されることが分かった。これより、教育目的の評価をはじめとする、より広い場面や対象に使用できるのではないかと考えた。

詳しくは田中・坪根・久保田（2018、以下、田中他2018a）、田中他（2018b）を参照されたいが、FC方式の重要な点は、評価項目をどのように絞るか、評価項目をどのような順序にするかの決定である。田中他（2018a）、田中他（2018b）のFCは日本語学習者のライティングを対象としていたので、例えば、「日本語」のトレイトでは、第1の評価決定要素は「（推測を働かせれば）日本語が読み取れるかどうか」という点である。一方、「構成・結束性」のトレイトは、日本人学生にも共通して使用可能だと思われるが、第1の評価決

定要素は「構成意識（話の順序を考えて書こうとする意識）」であり、思いつくまま書いたようなもの（その結果、唐突な印象を受ける）は構成意識がないとする。ここを通過しないと、それより上位の評価要素、例えば、「日本語」では、正確さやレジスター（適切さ）や言語要素の多様性等は評価対象とならない。同様に「構成・結束性」では、下位から順に、「パラグラフ意識」、「マクロ構成」、「パラグラフ間の結束性」等が各レベル上昇のチェックポイントとなり、最後に「序論と結論の呼応」をみるというようになっていく。トレイトと各レベル決定要素は、目的によって決定すればよい。

田中他（2018a）のラウンドテーブルでは、日本語のアカデミック・ライティング評価用に開発したトレイト別FCを紹介し、海外の日本語教育（JFL）環境や継承語教育、子供のライティング評価にも使用できないか、そのためにはどのような工夫が必要か、話し合った。その結果、レベルやトレイトを工夫することで環境を問わずFCを使用できる可能性、評価ツールとしてだけでなく、FCを学生と共有し、フィードバックする等、学生のライティング活動を補助するツールとしても使える可能性が示唆された。

## 1.2 ピアフィードバックの効果—評価者の視点の養成

学生のパフォーマンスに対するピアフィードバックの効果の1つは、言うまでもなく、他学生からのフィードバック内容を発表者が参考にできるということである。さらに、これと並ぶもう1つの大きな効果は、フィードバックする側として経験を積むことによって評価者の視点が身につくことである。

評価者の視点が身につくと自らのプレゼンテーションのパフォーマンス向上につながることは、先行研究でも繰り返し実践例が報告されている。たとえば、「学生が良いプレゼンテーションを実現するためには他者のプレゼンテーションの良し悪しを判断する評価基準を持つことが前提になると考えられる」（桐山2009）、「医学の分野でも、同僚評価の教育的有効性は、よく知られている」（高橋他2009）、「プレゼンテーション評価によって、表現力は向上し、また、評価能力も経験を重ねることによって高揚することが明らかになった」（英他2002）、「学生も評価に加わることで、他人の発表をよ

く聞くようになること、さらに、どういうことを評価するのか、あるいは評価されるのかということをも自分で理解しているから自分自身のプレゼンテーションを工夫するようになる」(英他2002)などである。

## 2. 本実践の概要

### 2.1 「プレゼンテーション」科目の概要と本実践の対象クラス

日本語学科の専攻言語科目の1つである「プレゼンテーション」は3年次必修科目として設定されている。発表形式を取り入れた授業は英語科目や演習系の専門科目などいくつかあるが、日本語学科が口頭発表の実践能力を養うことを主目的として設けている科目は、1年次必修の「音声表現1・2」、2年次必修の「音声表現3・4」、そして3年次必修の「プレゼンテーション1・2」である。それぞれ「1・2」のような番号が付いているのは履修登録上1期と2期に分かれているためであり、全学生が通年で受講する。本稿は2018年度2期の「プレゼンテーション2」のクラスにおける実践の報告である。特別聴講生や再履修者などを含めた当学期の履修登録者は計62名で、この62名を機械的に割り振って4クラスに分け、2名の教員が2クラスずつ担当した。

本実践の対象となったのは筆頭著者が担当する2クラスで、全課題をこなして単位取得した学生は16名と15名だった。前述の通り「プレゼンテーション2」は本来1期の「プレゼンテーション2」の続きとして開講されている科目だが、当該の2クラスについては2期から担当教員が急遽交代するという変則的な状況にあった。そのため、授業の開始にあたって特に念入りに2期の授業に対するニーズを探る必要があった。その過程で成績評価とピアフィードバックについても教員と学生の間で話し合うこととなった。

ピアフィードバックをどのような形式にするかについては、それぞれのクラスで話し合って学生の選択にゆだねた。1のクラスは項目が並列しており各項目4段階で評価する形式の一般的なフィードバックシート(本稿末の資料1)、もう1つのクラスはFC式フィードバックシート(資料2)を採用した。以下、それぞれのクラスを「項目並列クラス」「FCクラス」と呼ぶ。

なお、両クラスとも、ピアフィードバックはあくまでも相互研鑽を目的と

した学生間のやりとりとし、各自がフィードバックシートを記入した後は教員の手を経由せず直接発表者に手渡すようにした。教員も状況を把握しておく目的で、発表者のもとに集まったフィードバックシートを借りて目を通したが、その内容を発表者の成績に反映させることはしなかった。

## 2.2 フィードバック項目の決定と「項目並列式フィードバックシート」の作成

第1週の授業で、プレゼンテーション上達のために何をすることが必要かを話し合った。学生達から出た意見にはクラスによる目立った差はなく、要約すると以下のような内容であった。

- (1) 口頭発表のスキル（発声、イントネーション、姿勢、表情など）と内容（構成、根拠の提示など）の両方について練習が必要である。また、質疑応答の練習も必要である。
- (2) ピアフィードバックは有効だと思うが、シート記入の負担はあまり大きくない方がよい。シート記入が大変だと、質疑応答に参加する余裕がなくなってしまう。
- (3) 1期の授業では7分のプレゼンテーションに対してフィードバックの項目が16項目あり、それぞれを5段階で評価する必要があった。5段階で1や2といった悪い評価はつけづらく、結局全項目が3か4というようなあまり意味のないフィードバックになりやすい。項目の数を抑え、5段階評価にするかどうかも見直した方がよい。

第1週の授業では、これらの意見を踏まえて次週までに各自がフィードバックシートの案を作成してくるという課題を出した。2週目の授業でフィードバックシートの案を集めた後、3週目の授業までに、それぞれの案に共通する要素を教員が取りまとめてフィードバックシートを作成した。これが先述した資料1の項目並列式フィードバックシートである。

- (4) 口頭発表のスキルに関するフィードバック項目
- 立ち姿（姿勢やボディランゲージなど）
  - 声、テンポなど（聞き取りやすさ）
  - 視線
  - PPT（1枚のスライドに載せる情報量、見やすさ、効果）
  - 制限時間、約束ごと
- (5) 内容に関するフィードバック項目
- 熱意、興味を引く工夫、準備
  - メッセージの明快さ、わかりやすさ
  - 構成、情報の質と量、根拠の提示など
  - 表現（適切さ、難しい事や語の説明など）
  - 質疑応答

各項目は「4：特に良かった」「3：良かった」「2：普通」「1：いまいち」の4段階のいずれかを選ぶようになっている。また、「特に良かった点」「改善できる点」についての自由記述欄を設けてある。

## 2.3 「項目並列式フィードバックシート」からの「FC式フィードバックシート」作成

「プレゼンテーション2」の授業は15回あり、各学生のプレゼンテーションを3巡することが可能だった。テーマも学生と話し合っただけのため両クラスで異なるが、どちらのクラスでも、1巡目と2巡目は制限時間を3分とし、練習のためにあえて奇妙な条件を設けるなどの実験的な試みをした。3巡目は制限時間を10分とし、テーマに沿うことと制限時間を守ること以外には特別な条件を課さず、各自が自由に組み立てられるものとし、このプレゼンテーションのみを成績評価の対象とした。

1巡目は両クラスとも項目並列式フィードバックシートを用いてピアフィードバックを行った。2目に入る前にフィードバックシートの見直しの機会を作り、教員からFC式という選択肢を提案した。2ラスのうち1ラスは

引き続き項目並列式フィードバックシートを使うことを選び（項目並列クラス）、もう1ラスは、項目自体は同じだがそれをトレイト別FC式のフィードバックシートとして再構成して使用することを選んだ（FCクラス）。FCにする際に各項目の記述を多少修正し、スペースの都合で簡略化したため、項目並列式とFC式で多少文言が異なる場合があるが、フィードバックする項目自体に変化はない。項目並列クラスもFCクラスも、それぞれのフィードバックシートを3目でも使用した。

トレイト別FC式のフィードバックシート作成のためには、項目に優先順位を設けなければならない。FCのはじめの方にある項目が「No」であればその段階で評価点が決まり、それより先の項目が「Yes」であっても考慮されないため、優先順位の吟味は非常に重要である。本実践ではこの優先順位もクラスで話し合って決定した。ここでのトレイトは「スキル」と「内容」であった。つまり、以下のように、「スキル」の5項目を優先順位に従って並べたFCが1つ（6）、同様に「内容」のFCが1つ（7）、この2つのFCがセットになったものが「トレイト別FC」である。上にある項目ほど優先順位が高く、上から下に向かってFCが進むようにできている。

(6) 「スキル」トレイトのFCの項目と優先順位（優先順位の高い順）

制限時間

声、抑揚、テンポなど（聞き取りやすさ）

視線と表情

立ち姿、ボディランゲージなど

PPT

(7) 「内容」トレイトのFCの項目と優先順位（優先順位の高い順）

メッセージの明快さ

熱意、準備

表現の適切さ

構成

質疑応答

### 3. 結果

#### 3.1 10分プレゼンテーションの所要時間に表れた項目並列クラスとFCクラスの差

声の出し方や抑揚などの口頭発表の基本的なスキル、パワーポイントのスライド、話の構成、内容の充実度などについては、どちらのクラスもおおむね良くできている学生が多く、クラスによる傾向の違いは感じられなかった。しかし3巡目の制限時間10分の課題における各学生のプレゼンテーションの所要時間については、印象として、項目並列クラスとFCクラスの間に明らかな差があった。

この印象上の差を検証するために、録画してあったプレゼンテーションを再生して最初の発話の冒頭から最後の発話の末尾までを計測してクラスごとにまとめたところ、表1（項目並列クラス）と表2（FCクラス）の通りであった。表中で「所要時間」の欄の数値は、たとえば「6:38」であれば6分38秒の意である。各表は所要時間が短かったプレゼンテーションから長かったプレゼンテーションの順に並んでいる。

表1 項目並列クラスの学生16名のプレゼンテーション所要時間

学生	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	平均
所要時間	6:38	7:08	7:12	7:35	7:43	8:05	8:08	8:10	8:22	8:27	8:36	8:48	9:02	9:10	9:48	10:05	8:18

表2 FCクラスの学生15名のプレゼンテーション所要時間

学生	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	平均
所要時間	7:07	8:48	9:03	9:14	9:21	9:21	9:43	9:47	9:47	9:50	9:52	9:55	9:56	9:57	10:10	9:27

制限時間10分のプレゼンテーションとしては、項目並列クラスはやや短めに終わったものが多く、FCクラスは十分に時間を使い切りつつ制限時間に数秒の余裕を残して終わったものが多い。項目並列クラスの平均は8分18秒（最短6分38秒、最長10分05秒、標準偏差54.87秒）、FCクラスの平均は9分27秒（最短7分07秒、最長10分10秒、標準偏差43.60秒）で、両クラスの平均



の差は統計的にも有意である ( $t(29) = -3.48, p < .001$ )。個々のプレゼンテーション所要時間を見ると、項目並列クラスでは16名のうち9分に達した者が3名、その3名のうち9分30秒を超え10分以内におさめた者は1名である。これに対し、FCクラス15名のうち9分に達した者は12名で、9分30秒を超えて10分以内におさえた者に絞っても8名である。

### 3.2 フィードバックシートの記入状況概観とアンケートに見られる学生の意見

本実践ではピアフィードバックの内容を発表者の成績に反映させなかった。人の成績に影響を与えてしまうことを不安に思わずにフィードバックできるようにという配慮のためである。とはいえ、ピアフィードバックのしくみが機能しているかどうかを教員が把握しておくために、発表者のもとに集まったシートをいったん借りてざっと目を通すという形で記入状況をおおまかに確認した。また、最終週の授業で『『プレゼンテーション』の評価(フィードバック方法)』についてのアンケート』を行い、学生の意見を聞いた。

項目並列式フィードバックシートの記入状況から浮かび上がった問題点は、項目ごとの4段階評価の是非である。5段階評価では「3：普通」ばかりになってしまうという第1週の話し合いを経て2週目までに学生たちが作成した案では、提出された31案のうち、5段階評価を提案するものが9案、4段階が5案、3段階が3案、2段階 (yes/no) が2案、そして項目ごとの評価の詳細に言及がないものが12案だった。5段階と3段階の案では中央値に集中してしまう可能性があることと悪い評価はつけにくいことを考慮して、「4：特に良かった」「3：良かった」「2：普通」「1：いまいち」という4段階評価としたが、結局、どの発表に対しても「1：いまいち」が選ばれることはなかった。評価のパターンは、(1) どの項目も4または3ばかり、(2) 4と3、または3と2の、2段階の組み合わせ、(3) 4から2の間で分散、という3種類のいずれかだった。

4段階評価については、アンケートでも意見が分かれた。4段階評価の良い点については、当初から挙がっていた「真ん中がない」こと、肯定的な評価

のバリエーションが3段階あること（「4:特に良かった」「3:良かった」「2:普通」）、などの指摘があった。一方、良くない点については、結局良いほうに偏った変化の少ない評価になりやすく、自分のプレゼンテーションの中でどこが良くてどこが良くなかったのかわからないという指摘があった。

FC式フィードバックシートの記入状況から浮かび上がった問題点は、早い段階で「no」を付けることの難しさである。1つ目の項目が「no」なら1点、2つ目の項目で「no」なら2点、というように5項目分が積み重なり、すべてが「yes」で満点の場合は6点というスコアが付くが、「スキル」のトレイトも「内容」のトレイトも6点が付いているものが多く、低い場合でも4点程度までである。たとえば所要時間が7:07だったプレゼンテーションは、「スキル」トレイトの1つめの項目「制限時間」の判定が「no」で1点になるはずだが、実際には、この時集まった12枚のフィードバックシートの内訳は、6点が9枚、5点が1枚、4点が1枚、そして1点が1枚である。1点を付けたシートには「かなり早く終わっていた気がします」というコメントが書き添えてある。もう1枚、「制限時間」の「no」のところに印をつけ「短かった？」という書き込みのあるシートがあるが、この評価者は最終的には6点のところに2重丸をつけており、迷いつつも1点という判定は避けた様子である。

判定が「yes/no」の2択であることについて、アンケートの反応は肯定的なものが多く、「明確でわかりやすい」「迷わずに済む」「瞬時に評価できるので自由記述のコメントに時間が割ける」などの指摘があった。一方、問題点としては、「細かい評価ができない」という指摘があった。また、ある項目で「no」を付けた後、次の項目以降が「yes」の場合にはそれを伝えたいが、FC式では伝えられないのでフィードバックとしてもどかしいという指摘があった。

このように、FC式フィードバックでは「yes/no」の明快さが大きな利点である一方で、より精緻な評価にするためにはどうすれば良いかという問題もある。この点については「今後の課題」の節で改めて述べる。

## 4. 考察

### 4.1 学生自らがフィードバック項目と優先順位を決めることの効果

FCクラスの学生たちが「スキル」トレイトのFCの第1の項目を「制限時間」にしたのは、学期当初から教員が制限時間を守ることの必要性を強調し続けたことの影響の可能性がある。時間についての指導は何度も繰り返し、かなり細かく、具体的に、たとえば制限時間10分のプレゼンテーションでは「絶対に10分を超えてはいけませんが短くてもいけない。9分40秒から50秒の間に終了することが理想である。タイムキーパーと自分の時計がずれていて時間オーバーで強制終了になるのを避けるため、制限時間ちょうどではなく、数秒早めに終えること」というようなものだった。

制限時間遵守を強調する理由は、まず、現実問題として、発表形式の授業では発表スケジュールを管理することが重要だからである。熱心さゆえに発表が長くなり他の発表者の時間を圧迫してしまう場合などに、どう対応して公平性を確保するかは、教員の多くに共通する悩みであろう。もちろん、限られた時間の中での自分の持ち時間を意識して話の長さをコントロールできる能力は、社会人としても必要である。制約の厳しさは状況にもよるが、求められた時間にびたりと合わせる態度と技術は「プレゼンテーション」のような授業で身に付けておくべきものである。

興味深いのは、両クラスに対して同じように制限時間遵守を強調し、どちらのフィードバック項目にも制限時間が入っていたにも関わらず、時間という点に限って言えば、項目並列クラスよりもFCクラスのほうが圧倒的に要求通りのパフォーマンスを見せたということである。項目並列クラスの平均が8分18秒で9分台後半が1名だったのに対し、FCクラスの平均が9分27秒で9分台後半が15名中8名にのぼったという結果は、FCクラスのほうでより強く、時間をコントロールする意識が働いたと考えて差し支えないだろう。

また、どちらのクラスでも学生に回り持ちで司会兼タイムキーパーを任せしたが、FCクラスでは途中から司会者と発表者が「セーの」でストップウォッチのタイミングを合わせ、プレゼンテーション終了後に「時間もびったりでした」のようにアナウンスする習慣が自然発生した。ここにも、発表者とし

て時間を管理しようという意識と、司会として発表者の時間管理を積極的に助けようという意識が見て取れる。

FC式フィードバックシートでは項目に優先順位があり、1つ1つの項目を「yes」で通過しないと次の項目は考慮されないという仕組みになっているため、練習の目的を明確にする効果がある。ここで大切なことは、すべてを評価の対象とする必要はなく、項目の優先順位は目的に応じて変えるべきものだけということである。「制限時間」が最初にあるFCでは、それ以外の項目よりもまず時間を守ることが重要で、他が良くても評価されないため、制限時間に合わせるという意識とそのための技術は確実に身に付けなければならない。これがもし「序論、本論、結論、という構成」のような項目がありそれが「メッセージの明快さ」よりも前にあるFCであれば、とにかくまず「序論、本論、結論」を身に付けて、その次の課題が「メッセージの明快さ」ということになる。学生自らがFCの項目と優先順位を決めるということは、良いプレゼンテーションを構成する様々な要素（トレイト）を分解して、今自分達に必要なものを選び、段階的に身に付けるためのツールを用意するということである。

## 4.2 プレゼンテーション実技科目におけるピアフィードバックの負担軽減の必要性

プレゼンテーションを聞くという、瞬時に消えていく音声とパワーポイントスライドの視覚情報を同時に追わなければならない高度な認知活動に従事しながら、フィードバックシートにも記入するということは、相当な負担である。質疑応答の後でフィードバックシート記入用の時間を数分間設けることを約束しても、結局はプレゼンテーションの最中からシートへの記入を始めてしまうのが実情である。

ピアフィードバックの作業の負担が大きく手一杯になってしまうことは、質疑応答のスキルの練習機会喪失に繋がる問題である。1年次にも2年次にも口頭発表の実技科目を受講し、英語科目や演習科目でも「発表」を経験してきた上での本科目は、発表者として準備してきたことを話す練習にとどまら

ず、活発な質疑応答のための練習が可能な段階である。発表者の立場にあるときは、あえて質問を待って自説を補強したり、質問者の求めに応じて情報を明確化したり、内容の不明瞭な発言や批判的な発言に対応したりという練習の機会である。一方で聞き手の立場にあるときは、その場の参加者全員にとって有意義な経験となるように質問やコメントを通じて貢献する練習の機会である。聞き手がフィードバックシートの記入に気を取られるあまり質疑応答が不活発に終われば、このような練習の機会を失うこととなる。

学生たちのアンケート回答にもあったように、FC式フィードバックシートには、各項目の判断が「yes/no」なため、5段階評価などくらべて迷いが少なく、フィードバックの負担が軽いという利点がある。この利点を活かし、より効果的なピアフィードバックの方法として洗練させるためには、FCを精緻化するための工夫と、評価者としてのトレーニングが必要である。

## 5. 今後の課題：FCの精緻化と評価者としてのトレーニング

本実践では、1巡目のプレゼンテーションが終わった段階で、両クラスに対して、フィードバックシートをFC式に作り替えるという提案をした。この時にFC式ではなく項目並列式を選んだクラスでは、FC式の「yes」か「no」という極端な判定への抵抗感を訴える声が増えた。FCクラスはFC式に興味を持ったからこそ実際に試して、「yes/no」であることを「明快」「迷わなくて済む」「時間がかからない」と肯定的にとらえたが、項目並列クラスの学生の抵抗感ももつともである。どちらとも言いきれない場合に何を基準に「yes」か「no」かを決めるのかという迷いに苦しんで時間がかかってしまう可能性は十分に考えられる。また、「no」ならそれより先の項目は良くても考慮されないという極端さが「no」判定を抑制すれば、FCクラスで実際にその傾向が見られたように、すべてが「yes」で6点満点ばかりという、フィードバックとしての価値を揺るがす結果にもなりかねない。

この問題を解決するためには、各項目の記述をより精緻にして、「ある程度」「ほぼ」「十分に」のような、段階的な達成度を設定する方法がある。たとえば田中・坪根（2019）では、ライティング評価のために（8）の通り「目

的・内容」というトレイトのFCを作成しているが、このFCの2番目から4番目の項目は、(9)(10)(11)のような段階的な記述になっている(下線は筆者)。

- (8) 「目的」は、課題達成、つまり、「比較」がなされ「意見」が述べられているかを評価し、「内容」は、メインアイデア(この文章で言いたいこと)の一貫性とサポート(理由、例、説明、読み手の背景知識への配慮)の妥当性を評価する。
- (9) メインアイデアについての何らかのサポートがある。
- (10) メインアイデアの一貫性とサポートの妥当性が、ある程度以上認められる。
- (11) メインアイデアに明確な一貫性・妥当性が認められ、効果的なサポートがある。かつ、文章全体に対しては、社会的な視点、普遍性、客観性が認められる。

(田中・坪根、2019、p. 3)

本実践で作成したフィードバックシートでは項目記述はあまり詳しくなく、特に、FCを作る際には紙面の都合のため一段と簡略化してしまった。フィードバックシートの記述が煩雑では読むのに時間がかかり負担が大きくなるので簡略化した方がよいという筆者の思い込みもあった。しかし、(9)～(11)のように、項目を必要に応じて段階的に細かく分けて詳しく記述する方が、迷いを減らすことができる。

効果的な評価・フィードバックをするためには、評価者としてのトレーニングも必要である。上述の田中・坪根(2019)は「ライティング評価の統一を試みる一フローチャートの活用一」というワークショップの資料だが、このワークショップでは日本語学習者の作文を何種類か、参加者各自が実際に評価して互いに比較し合うというグループ作業を行った。参加者はまず、自分が甘い採点者なのか辛い採点者なのかという傾向や、「上手な作文」と「好きな作文」を選べと言われた場合の違いについて考えた。また、同じ作文を同じ評価シートを使って採点しても、わずか4人程度のグループ内でさえ一

致はしないことなどを体験した。さらに、それぞれがなぜそのような評価に至ったかを話し合っって基準のすり合わせを行うことで、より安定した、かつ早い判断ができるようになった。

ピアフィードバックには評価の統一は必要ないが、このようなトレーニングを応用して、自分の傾向を自覚し、自分なりの判断基準を人との比較の中で洗い出すことで、判断の迷いを減らして、より効果的、効率的なフィードバックをすることができるようになると期待できる。

## 6. まとめ

「トレイト別FC」は、もともと評価者間および評価者内での信頼性向上に有効なツールとしてライティング評価用に開発されたものである。本実践では、同じくパフォーマンスであるプレゼンテーションについて、項目並列式とFC式によるピアフィードバックという試みが行われた。

本実践について重要な点は、フィードバックの項目や評価方法が、学生と教師の話し合いで作成されたということである。特にFC作成に当たっては、項目の優先順位もクラスの話し合いで決定した。

項目並列クラスとFCクラスのプレゼンテーションには、極端な傾向の違いは見られなかったが、プレゼンテーションの所要時間だけは顕著な差があった。制限時間10分のプレゼンテーションで、項目並列クラスではやや早めに話し終える発表者が多くクラス平均が8分18秒程度だったのに対し、FCクラスの平均は9分27秒で、持ち時間を十分に使い切ることのできた発表者がクラスの半数以上を占めた。

項目並列クラスとFCクラスの時間の差をもたらしたものがFCの効果であると断定するには、本実践報告では検証が及ばない。しかし、FCという形で評価項目とその優先順位を明確にして伸ばすべき力を確実に伸ばすという手法は、今後改良して実践を重ねていくだけの価値があるといえる。

## 付記

本実践報告のために快く協力してくださったクラスの皆様にお礼を申し上げ

げます。また、この論文は、JSPS 科研費 26284074「日本語ライティング評価の支援ツール開発：「人間」と「機械」による評価の統合的活用」（田中真理代表）の助成を受けました。

## 参考文献

- 桐山聰（2009）「学生の質問力向上を狙った評価方法の開発」『工学教育』（Journal of JSEE）57-1：99-102.
- 高橋優三・長野功・呉志良（2009）「学生がプレゼンテーション技術を学ぶための自己評価と同僚評価の評価シートの試作」『医学教育』40(5)：355-359.
- 田中真理・阿部新（2014）『Good Writing へのパスポート—読み手と構成を意識した日本語ライティング』くろしお出版
- 田中真理・坪根由香里（2019）「ライティング評価の統一を試みる—フローチャートの活用—」名古屋大学法政国際教育協力研究センター・名古屋大学国際言語センター共催ワークショップ配付資料（2019年3月2日，名古屋大学アジア文化交流館2階カンファレンスルーム）
- 田中真理・坪根由香里・久保田佐由利（2018a）「トレイト別フローチャートを用いたライティング評価：カナダ・アメリカにおける応用」『CAJLE 2018 Proceedings』284-293. [https://www.cajle.info/wp-content/uploads/2018/09/33CAJLE2018Proceedings\_TanakaMari-TsuboneYukari-KubotaSayuri\_Final.pdf]（2019年3月31日確認）
- 田中真理・坪根由香里・佐々木藍子・影山陽子・阿部新（2018b）「ライティング評価におけるフローチャートの開発：評価の一致を目指す場合」『Book of Abstracts, Venezia ICJLE 2018 平和への対話』289-290. [https://www.eaje.eu/media/0/myfiles/icjle2018/icjle-2018-book-of-abstracts.pdf]（2019年3月31日確認）
- 田中真理・長阪朱美・成田高宏・菅井英明（2009）「第二言語としての日本語ライティング評価ワークショップ—評価基準の検討—」『世界の日本語教育』19：157-176. [https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/archive/globe/19/10.pdf]（2019年3月31日確認）
- 英崇夫・日下一也（2002）「プレゼンテーションの実施によるアウトカムズ評価の新しい試み」『工学教育』50(50)：47-53.

## 関連Webサイト

- 「Good Writing.jp 読み手と構成を意識した日本語ライティング」<<http://goodwriting.jp/wp/>>（2019年3月31日確認）
- 「評価用フローチャート」<<https://goodwriting.jp/wp/system-flowcharts/>>（2019年3月31日確認）



資料1 項目並列式フィードバックシート

評価項目	点数						
	4	3	2	1	特に良かった 良かった 普通 いまいち		
スキル							
立ち姿（姿勢やポゼイティングなど）	4	3	2	1			
声、テノボなど（聞き取りやすさ）	4	3	2	1			
視線	4	3	2	1			
PPT （1枚のスライドに載せる情報量、見やすさ、効果）	4	3	2	1			
制限時間、約束ごと	4	3	2	1			
熱意、興味を引く工夫、準備	4	3	2	1			
メッセージの明快さ、わかりやすさ	4	3	2	1			
構成、情報の質と量、根拠の提示など	4	3	2	1			
表現（適切さ、難しい事や語の説明など）	4	3	2	1			
質疑応答	4	3	2	1			
<table border="1" style="width: 100%; height: 150px;"> <tr> <td style="width: 50%; text-align: center;">特に良かった点</td> <td style="width: 50%; text-align: center;">改善できる点</td> </tr> </table>						特に良かった点	改善できる点
特に良かった点	改善できる点						

資料2 トレイト別フローチャート (FC) 式フィードバックシート

